様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 7日現在

機関番号：３２６３２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２０１０～２０１１
課題番号：２２７２０２０５
研究課題名（和文）
「聞いて話す」能力測定のための基礎的研究
研究課題名（英文）
A Preliminary Study for Assessing the Pragmatic Competence

研究代表者
西村　美保　（NISHIMURA MIHO）
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号　６０４１０８７５

研究成果の概要（和文）：
日本語非母語話者の聞き手行動を調査した結果、会話への聞き手側からの積極的な参加が必要な引き取りの方法は難度が高いということがわかった。これは言い換えれば、ACTFL-OPI判定において、「語用論的能力」が、中級話者の受け身的な態度と、上級話者の自発的な態度とを決定的に隔てているということになる。このことから、聞き手となる日本語非母語話者が、話し手である相手（テスター）の意図や文脈などを適切に推測した上で応答できるかどうかの能力が、談話管理のストラテジー、ひいては対話を続ける能力を測る一つの指標となると言える。

研究成果の概要（英文）：
The result of the study on the reactive tokens of non-native Japanese speakers shows that the turn-taking in which the listener has to participate actively is difficult. That is, in ACTFL-OPI, the fundamental proficiency which separates the passive intermediate speakers from the active advanced speakers is decided by the proficiency in speaking through listening, i.e., the pragmatic competence. From this it follows that the competence of non-native Japanese speakers in responding, as listeners, after properly speculating on the intentions of their testers or the context involved can be counted as one index for assessing the strategy of discourse management.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：ACTFL-OPI、「聞いて話す」能力、語用論的能力、共同発話、先取り、予測

１．研究開始当初の背景

現在行われている日本語能力試験には、口頭能力を測定するテストが採用されておらず、ACTFL-OPIがそれを補う役割を担うことができると考えられる。日本語OPIテスターの数は非常に多く、教育機関内では日常的に非公式のOPIが行われており、また、日本語の読み書きが全くできない定住者などを対象にも日本語能力の判定を行うことができる。

しかし、テスター間の評価のゆれが指摘されていることから、ゆれを減少させるためのガイドライン以上の具体的かつ詳細な記述が必要な現状にある。

２．研究の目的

ACTFL-OPI判定の信頼性を向上させるため、ガイドラインに明記されない具体的かつ詳細な判定基準の記述を目標とし、「聞き手の反応」の調査を試みることにした。

本課題に取り組む前年度に、ＫＹコーパスを用いて「聞き手の反応」を調査したところ、レベルの向上にしたがって先取りあいづちの「そうですね（え）」や共同終結が増えることが観察され、共同終結の中でも学習者自身の内容に関することかテスター（相手）の内容に関することかによって難易度に差がある様子が伺えた。

本課題は、共同終結に関してさらに追及し、ACTFLガイドラインにおける語用論的能力に関して、より具体的な記述を提示し、日本語を話す能力の上達する様相の一部を解明することが目的である。

３．研究の方法

初級－上から超級まで合計80本のACTFL-OPI文字化資料を分析対象とし、「聞き手の反応」の中でも特に「共同発話」の方法と内容に関して調査を行った。

国立国語研究所の「日本語学習者会話データベース」から、レイティングが一致しているインタビュー151本のうち、レベルと母語の分布から、各レベル10本ずつを目安とし、68本を対象とした。レベル・母語によっては対象となるインタビューがないものもあったため、各レベル10本ずつにそろえるため同研究所の「日本語会話データベース縦断調査編」のパイロットデータから10、外国人分散地域会話データから2のインタビューを追加した。

80本のインタビューは音声が公開されているものも多くあるが、非公開のものもあるため、すべて文字化されたデータを分析対象とし、共同発話とみられる部分を抜き出し、量的・質的分析を行った。

表1　分析対象インタビューの母語・レベル内訳

	韓国語	中国語	英語	その他	合計
超級	3	1		1	10
(パイロット)		2	1	2	
上級－上	3	3		2	10
(パイロット)			2		
上級－中	3	2	2		10
(パイロット)				3	
上級－下	3	3	2	2	10
中級－上	3	3	2	2	10
中級－中	3	3	2	2	10
中級－下	2	2	1	3	10
(分散地域)		1		1	
初級－上	3	2	0	5	10
合計	23	22	12	23	80

４．研究成果

(1) 共同発話のレベル別の数値

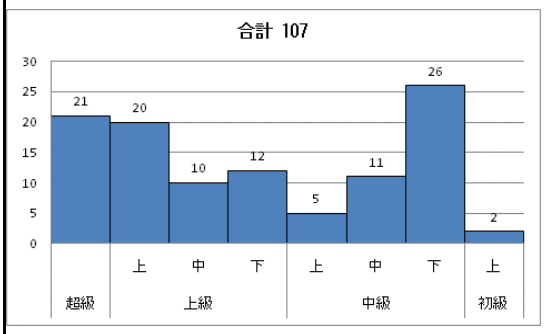

図1　共同発話のレベル別数

図1からわかるように、学習者のレベルが上がるほど共同発話が増えるという傾向は見られず、また、学習者の母語別に見ても、その違いや傾向は見られなかった。量的分析からは、その傾向は見られないが、その共同発話がどのようにされているか、質的に観察すると、その傾向が明らかになった。

(2) 共同発話の方法

共同発話において、話し手の発話の引き取りの部分、つまり、どのように引き取っているかを中心に分析したところ、大きく、次の4種類に分けることができた。

a. 「が／では」などの助詞から引き取る
b. 「繰り返し」で引き取る
c. 「あいづち的な発話」で引き取る
d. 「それ」などの指示詞で引き取る

a. 「が／では」などの助詞から引き取る方法に関しては全体で2例しかなく、上級の上以上で見られた。一方、bの「繰り返し」、cの「あいづち的な発話」は比較的多く、特にbに関しては中級－中以下に集中しており、cに関しては超級－初級まで満遍なく見られるとい

う傾向があった。そして、d「それ」などの指示詞に関しては全体で3例しかなく、超級と中級の上でそれぞれ見られた。

以上の結果から、「あー」などのあいづち的な発話で引き取ることはレベルに関係なく見られるが、助詞で引き取ることは比較的高度な引き取り方であり、上級の上以上でなければできない共同発話であると思われる。また、繰り返しに関しては中級以下の場合は後述の①「発話権を譲っているように見える場面」での繰り返しが多く、一度テスターの発話を反芻して、共同発話をしているため、数値が高くなっていると思われる。

(3) 共同発話の内容の傾向

共同発話の内容、つまり、どのような話題を引き取っているかを中心に分析したところ、次の4種類に分けることができた。

① 話し手が発話権を譲っているようにも見える場面

② 助け舟

③ 話し手が継続してもいい場面での先取り（割り込み）

③-1. 肯定の先取り

③-2. 否定の先取り

T:日本もその東京とか大阪〈はいはい〉，そのラッシュありますけど，い，違いますか，イタリアのと
I:あいえいえ，全然違いま＊{笑}
T:全然ち〈ん〉，違う
I:んいえいえ同じ＊＊＊
T:同じですか〈うん〉あやっぱりねー〈んんん〉そうですか，へー，あの一，えーとじゃあイタリアではえー，【名Bの一部】〈【名B】〉，★14★【名B】{笑}〈{笑}〉すいま，自転車にはあまり乗らなかったんですか
I:うん，乗らなかった
T:あじゃ日本では
I:いつも乗る{笑}

図2 ①話し手が発話権を譲っているようにも見える場面の例（中級 - 中/イタリア語）

T:はい，であの，え一ま先生あの，大学でお勤めでいらっしゃるので，あの， 最近あの，え一板東真理子さん，え一学長さんが〈はい〉あの一まあ
I:『女性の品格』
T:『女性の品格』とか出しましたよね，で板東さんのところにあのいらして，

図3 ②助け舟の例（超級/韓国語）

I:ですから私たちの取材，取材の仕方と〈はい〉，そして日本の記者からの取材，取材の仕方っていうのはもう，昼と夜，全く違うんですよ。
T:あっ，ということは日本の方は，もう警察に，べったりと，付いてるっていうことですね。
I:べったりと付いているんですよ〈あー〉，もう，警察は。ですから警察が，もう，こういう報道があるから，から〈うーん〉，あの一，冤罪が生じるんですよね。
T:うーん，冤罪っていう面ではアメリカでも，今ずいぶんなんか，冤罪が…
I:問題なんですよそれが。
T:なってますよねー。
I:なってます，なってます〈うん〉。

図4 ③-1. 肯定の先取りの例（超級/ハンガリー語）

I:人で〈ん〉，そんで，あの一彼女たちのね〈ん〉，振り付けっていうのも〈ん〉，ちゃんとあの＊ーからこう担当しております〈んー〉，そういうところはもう韓国内でもかあの一認められておりまして
T:あおもしろそうだね
I:え〈んー〉，それで一そうですねあの〈ん〉，今までのその一，まあ日本にはね〈ん〉，なかったようなパターンの〈んー〉，あの一アイドル，アイドル，ですねはいアイドルー
T:じゃあちょっとさ〈はい〉，なるほど，じゃあね，★28★日本にモー娘，いるよね，＊＊〈はいはいはい〉，それのかんこくーばん[韓国版]で売り出して
I:ではないと思います

図5 ③-2. 否定の先取りの例（超級/韓国語）

①はテスターが日本語非母語話者（インタビューイー）に発話を促しているようにも見える、つまり、義務的にではないにしろ、非母語話者に参加を促しているのに対し、②～③-2は非母語話者の積極的な参加である。

そうした特徴を持つ共同発話が、レベル別にどのように現れていたのか、それぞれの特徴を見ていくと、まず、①に関しては、中級－中、中級－下に多い傾向だが、他のレベルでも満遍なく共同発話が現れていることがわかった。次に、②に関しては、上級－上より上のレベルにしか現れておらず、上級であっても上級－中より下のレベルでは見られなかった。そして、③-1は、超級が一番多く、超級から中級－下にかけて、使用数が減っていた。最後に③-2に関しては、わずか1例であり、超級にしか見られなかった。

これらの結果を見る限り、中級－中以下は相手（テスター）からの促しがない限り、積極的に相手の発話に介入し、共同発話をすることができないことがわかる。そして、相手の発話に積極的に介入し、共同発話を作りだすことができるようになるのは上級以上、「助け舟」に至ってはほぼ相手側の持つ情報であるため、上級－上や超級のレベルにならないとできない共同発話ではないかと思われる。

(4) 「聞いて話す」能力が生み出す積極的態度と予測

以上のことから、「普通、どのようなコミュニケーションのやりとりでも主導権を取りたがらない」ACTFL-OPI中級話者の「受け身的」な態度と、上級話者の「対話に参加しようとする意欲」のある自発的な態度とを隔てているものは、判定に用いられる四つの柱のうちの一つである「正確さ」に含まれる六つの下位項目中の、「語用論的能力」であると言えるのである。

本課題で明らかになったことは、「聞き手」としての発話である「共同発話」などの聞き手行動に難易度があり、その難度の高い聞き手行動ができるということが、「聞いて話す」能力すなわちACTFLガイドラインでいう語用論的能力が高いということである。

聞き手となる日本語非母語話者が、話し手である相手（テスター）の意図や文脈などを適切に予測した上で応答できるかどうかの能力である「聞いて話す」能力が、談話管理のストラテジー、ひいては対話を続ける能力を測る一つの指標となると言うことができる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

① 西村美保、OPIにおける「聞いて話す」能力測定の意義、清泉女子大学紀要、査読有、第59号、2011、pp.185-191

〔学会発表〕（計3件）

① 稲熊（西村）美保・古川智樹、OPI発話における学習者の「聞き手の反応」―共同発話を中心に―、2010世界日本語教育大会(ICJLE2010)、2010年7月31日、国立政治大学（台湾・台北）

② 西村美保、OPIにおける「聞いて話す」能力測定の意義、第8回国際OPIシンポジウム、2011年8月6日、ポートランド州立大学（米国オレゴン州）

③ 西村美保、OPIにおける語用論的知識、日本語プロフィシェンシー研究会2011年度第1回例会、2011年11月19日、南山大学（名古屋市）

６．研究組織

(1)研究代表者

西村　美保　（NISHIMURA MIHO）
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：60410875